

自ら学び続ける児童を育てる算数学習

1 研究のねらい

私は、児童に学ぶ楽しさを十分に味わわせ、自ら学び続ける児童を育てたい。学習指導要領解説総則編(2017)には、「資質・能力を見に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることが求められている」と、自ら学び続けることの重要性が明記されている。

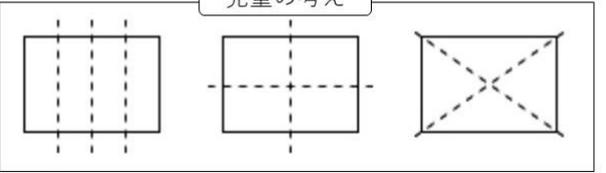
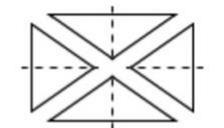
池野(2013)は、自ら学び続ける児童について「問題意識を醸成すること（一人ひとりが自ら問題をつかみ、その問題に対して考えていこうとする意欲を引き出すこと）が重要な課題」と、自ら「問い」を発見し、その解決に向けて粘り強く取り組むことが重要であると述べている。

また、池野は「自らの学びに対して振り返ることにより、自らの『学びたい・伸びたい』という願いを思い起こし、それに向けて自ら学ぼうとする態度を引き起こし、主体的な学びの態度を醸成していく」とも述べている。櫻井(2019)は、「授業内容について一定の理解がなされたり課題解決に成功したりした場合には、学ぶことの面白さや楽しさ、有能感（自己効力感）、充実感（自己有用感）が生じ、自尊感情が高まる。こうした認知や感情を生じさせるには一定の基準で『振り返り（自己評価）』を行うことが必要。後続の授業などでさらに自ら学ぶことを促す」と述べており、児童の感情に目を向けて振り返りを行うことによって、学ぶ面白さや楽しさ、有能感が生じ、次の学習につながるとしている。

以上のことから、「自ら学び続ける児童」を自ら「問い」を発見し、その解決に向けて粘り強く取り組み、自分の感情に目を向けて学習を振り返り、学びを価値付けていく児童とした。

これまでの私の実践では、問題を提示した後、解決の見通しをもたせることで、解決に進んで取り組ませることはできたが、問題を教師が提示するのみで、児童に自ら問いを発見させることができていなかった。そのため、児童の認識が曖昧になるところを発問や問い返しをしてゆさぶりをかけることで、自ら「問い」を発見することができるようにしようと考えた。また、振り返りを行う場面では、児童は私の指示に従って「振り返り」を行っているに留まっていた。振り返りの対象も、「答え」と「その答えを導くには〇〇をすればよい」という最終的な結果だけが中心になる傾向があった。そのため、授業について抱いた感情を尋ね、その感情を抱いた理由を考えさせることで、学びを価値付けていこうと考えた。

そこで、「児童の認識にゆさぶりをかけて、問いを発見する活動」と「感情に目を向けて振り返り、学びを価値付ける活動」の二つに焦点を当てて、研究テーマに迫っていく。目指す児童の姿は、例えば、2年「分数」の学習を例にすると、次のような姿である。

<p>児童の認識にゆさぶりをかけて、問いを発見する活動</p>	<p>問題： 長四角のケーキを半分の半分に分けてみよう。</p>	<p>感情に目を向けて振り返り、学びを価値付ける活動</p>	<p>児童の切り取った図形</p>
<p>児童の考え</p> 		 <p>切った一つを「2分の1」にすると全てぴったりと重なることが分かってうれしい。</p>	
 <p>一番右は、本当に平等なのかな？</p>	 <p>初めは平等ではないと思ったけれど、全て同じ大きさだったので驚いた。</p>	 <p>重ならなくても、みんな同じ大きさなら平等なんじゃないかな。</p>	 <p>他に形が違って、大きさが同じになるケーキはあるのかな。もっと知りたいな。</p>
 <p>形が違って、大きさが一緒なら平等って言えるよね！実際に切ってみよう！</p>	<p>【自ら学び続ける児童を育てる算数学習の一例】</p>		

2 研究の内容

(1) 対象児童 1年生 26人

(2) 研究の手立て

手立て① 児童の認識にゆさぶりをかけて、問いを発見する活動

予想される児童の誤答や誤概念など、児童の認識が曖昧になるところを発問や問い返しをしてゆさぶりをかける。そうすることで、自ら「問い」を発見することができるようにする。

手立て② 感情に目を向けて振り返り、学びを価値付ける活動

「今日の気持ち」を記入し、その感情を抱いた理由を学びの視点を与えて振り返らせる。そうすることで、自らの学びを価値付けることができるようにする。

(3) 検証方法

検証① 児童の認識にゆさぶりをかけて、問いを発見する活動

児童の誤答や誤概念に発問や問い返しをしてゆさぶりをかけたことで、自ら「問い」を発見することができたか、ノートやワークシートへの記述からつかむ。

検証② 感情に目を向けて振り返り、学びを価値付ける活動

「今日の気持ち」を記入し、その感情を抱いた理由を学びの視点を与えて振り返らせたことで、自らの学びを価値付けることができたか、児童の活動の様子やノート、ワークシートへの記述からつかむ。

3 実践例

(1) 単元 「ひきざん (1)」(7/11)

(2) 本時の目標 「いくつ多いかを求める」場面で、ひき算の式にかいて答えを求めることができるようにする。

主な教師の働き掛け	主な児童の反応
<p>問題 どちらのほうが なんこ おおいですか。</p>	
<p>【手立て①】 児童の認識にゆさぶりをかけて、問いを発見する活動</p>	
<p>T : どのような式になるかな。 T : 「6」と「2」って何の数ですか。 T : メロンの6個からスイカの2個ってどうやってひくのかな。 T : (あえてスイカの数図ブロックだけを操作して) スイカから2個取ったらメロン6個が答えだね。</p>	<p>C : 「6-2」になると思います。 C : 「6」はメロンの数、「2」はスイカの数です。 C : 確かに…。どうのことだろう。 C : 数図ブロックを使って確かめたい。 C : 先生、ちがうよ。スイカの2個を取るのではなく、メロンから2個取らないといけないよ。 C : メロンとスイカを一緒に取ったらどうかな。</p>
<p>めあて いくつ おおいかを しきに あらわして かんがえよう。</p>	
<p>【手立て②】 感情に目を向けて振り返り、学びを価値付ける活動</p>	
<p>T : 今日の気持ちはどうでしたか。 T : どうしてその気持ちになったのかな。 学びの振り返りレベルを参考に書いてみよう。</p>	<p>C : とてもよくできました。 C : 初めはどうやって考えたらよいか分からなかったけれど、〇〇さんの「ペアでバイバイ」という考えを教えてもらって、とてもよく分かりました。 C : 「片方バイバイ」の学習と同じで、「ペアで一緒に片方バイバイ」することが分かってうれしかったです。 C : 右側の数が多い時は、「ペアでバイバイ」することができるのかな。</p>

〈参考・引用文献等〉

文部科学省『小学校学習指導要領解説総則編』(2017)

池野正晴『自ら考えみんなで作る算数学習』(2013)

櫻井茂雄『自ら学ぶ子ども～4つの心理的欲求を生かして学習意欲をはぐくむ～』(2019)